

緑の架け橋

会報第 20 号

2012年06月30日

大河の一滴から、「緑の架け橋」へ ～10周年記念、第17回植林派遣団報告～



10年後の紅寺堡の模様（2012・4・15）。右上は10年前の原型

下：砂漠に出現した紅寺堡鎮の街並



2002年11月 緑の架け橋推進センターを設立し植林プロジェクトがスタートしました。これは日中緑化交流基金の助成を得たもので事業主催・IFCC国際友好文化センターの呼び掛けに依拠してのもの。最初に実施しました紅寺堡の10年後は文字通り変貌しました。

IFCC 国際友好文化センター

〒162-0801 東京都新宿区山吹町 333 辻ビル 405 TEL. 03-3268-4387 FAX. 03-3268-6079

口座：中央労働金庫市ヶ谷支店（普）0858119

郵便：00130-9-425994

本会報は事業主催（IFCC）の植林プロジェクト特集となります

 緑の架け橋プロジェクト
中国植林緑化活動協力事業

第17回植林緑化派遣団(2012年4月13日~17日)活動報告

～ 7 年 ぶ り の 現 地 に 感 慨 極 ま る ～

自治労・津久見市職労 野々下直人

○4月12日(木)事前学習および結団式、壮行会

下の写真は、2012年の事業地の模様

都内「ルポール麹町」に、佐藤晴男団長以下、全国から派遣団10名が集結し事前学習会および結団式、壮行会が行われた。

石嘴山市恵農区(2012・5) 沙枣、紫穗槐



吳忠市太陽山開発区(2012・5) 紅柳



河北遷西県(2012・5) 側柏の遠景



事業開始から10周年を迎える「緑の架け橋」の活動。その間、派遣された団員は約200名にも上り、現地のボランティアと協同で植林した面積は、実に2,200ha以上にも及ぶとIFCC鎌田事務局長より説明を受けた。中国側の「砂漠を緑の大地に」という壮大な計画への事業協力と、この植林事業を日中の友好と、平和の「架け橋」にしたいという所期の目的が、着実に根付きつつあると感じた。

私は、2005年4月に第3回植林緑化派遣団の一員として参加し、今回、再び訪問の機会を頂いた。スケジュールの説明を受けると、継続中である2つのプロジェクトへの植林と、植林済地の視察が予定されていた。この植林済地こそ、第3回植林緑化派遣団が植林を行った「寧夏紅寺堡生態緑化プロジェクト」で、「緑の架け橋」の記念すべき1回目のプロジェクトでもある。あれから7年。地元の中学生と植えた木はしっかりと根付いているのだろうか、過酷な自然条件の中、植林後の管理が徹底されているのだろうか、植林時は枝も葉もない棒のようだったポプラの木々が、立派に育ってくれているのだろうか、そして何もなかった砂漠が、本当に「まち」となっているのだろうか、すぐにでもこの眼で確かめたいという思いがこみ上げてきた。

活動報告では、再び現地を訪れる機会を頂いた数少ない団員の一人として、また、第3回植林緑化派遣団27名の代表として、自分たちの手で植えた木がどう成長していたのか、10周年を迎える「緑の架け橋」の活動で、砂漠だった現地がどう変化を遂げていたのか、そういう視点を交えながら報告したいと思う。

○4月13日(金) 羽田出発、北京経由で銀川へ

6時30分に羽田空港集合。早朝の出発だったが、羽田発着となり大変便利になった。ただ、出発を前にして不安材料が一つ。それは、北朝鮮によるミサイル発射の予告期間に入っていることだった。入国審査を済ませ搭乗直前のまさにその時、

その不安は的中。テレビにミサイル発射の速報が流れ「まさか?」「大丈夫か?」と派遣団は緊張に包まれた。

その不安は的中。テレビにミサイル発射の速報が流れ「まさか?」「大丈夫か?」と派遣団は緊張に包まれた。ちなみに、前回の2005年4月は、小泉元首相による靖国参拝や歴史教科書問題により中国との関係が悪化。中国各地で発生した反日デモが連日報道され、搭乗直前のテレビには、北京の日本大使館に火炎瓶や石が投げ込まれ、日の丸が燃やされている映像を見ながらの出発であったので、まさか、二度も搭乗直前に同じような緊張感を味わうとは思いませんでした。幸いにも定刻に出発し、北京経由で銀川に17時頃到着した。北京では、スルーガイドの劉さんと合流、7年ぶりの再会を喜びあった。また、銀川空港到着時は、前回と同様に、中青連(中華全国青年連合会)の方々や地元政府のみなさんに迎えて頂き、銀川空港が新しく立派な空港に生まれ変わっていることに驚きながらホテルへと向かった。

ホテルまでの道中、以前は市中心部まで何もなく沿道に、華やかな広告塔が立ち並び、アパートなどが団地形式でいくつも建設されているのには驚いた。また、夜になると街路灯も少なく、薄暗い感があった銀川市中心部も、きらびやかなネオンに照らされ深夜まで消えることがなく、人々の服装などは、以前よりも鮮麗されているように見受けられ、この7年間で発展ぶりが感じられた。夕食は、中青連の方々や地元政府のみなさんと共にし、植林事業について様々な意見交換を行った。その中で、中青連の方より、昨日までは季節外れの寒波の影響で天候が悪く、最高気温も5℃程度であったが、今日からは晴れが続き、最高気温も25℃の予報が出ている。滞在中、いい気象条件の中で植林活動ができるのは、派遣団のみなさんが日本から「晴れ」を持ってきてくれたおかげだとあいさつを受け、佐藤晴男団長が、それは私の名前が「晴男(晴れ男)」だから…、などと冗談も飛び出しとても和やかな夕食会となった。

○4月14日(土) 石嘴山市惠農区生態緑化モデル林事業(第2期)



惠農区二期開工式で宣言する小学生

共同宣言

春風ふく季節黄河金岸
美しい桜が遠方の友人を迎えます
新緑とともに両国が一つの友情に結ばれます
この緑を絶やさずことなく継続するように友情も永遠に続けていきましょう

皆とともに私たちの家、地球を守ります
地球を大事にすることが人間の使命です

水は私たちの命
緑は私たちの希望
青空は鳥たちが飛びまわる
大地は命が育つ

家を守る、すなわち自らを守ること
家愛する、すなわち命を尊重すること

この美しい季節、青い空、白い雲、緑と水を保つため
私たちは熱意を持って環境保護の知識を伝え行動によって大切な任務をはたします。

手を取りあい 共同宣言

紙クズや果物の皮をむやみに捨てない
芝生の草花をふまない
割り箸を使わない

まわりのゴミを拾えば世界を明るくする
川のゴミを拾えば川から湖そして海まで美しくする
町中に貼られたチラシがなくなれば町がもっときれいになる

母なる川、黄河の水をきれにするために私たちと一緒に緑をふやしましょう

寧夏の空がさらに青くなるように、低エネルギー生活を心がけましょう
中日両国友好のため私たちが新風となり友愛と助け合いの新たな関係を樹立します
手を取りあい緑で未来を描きましょう

8時にホテルを出発し、石嘴山市恵農区へと向かった。天気は快晴である。市中心部を過ぎたあたりから「ため池」が多数みえ始めた。灌漑用なのかと思ったら魚の養殖にも利用しているとのこと。前回訪問時には、水の確保だけでも非常に困難だと説明を受けた地域であったので、ため池の数の多さにも驚いたが、収入を得るため養殖用に活用していると聞き、植林事業がもたらした意外な効果にも驚いた。



また、沿道には地域住民が植林した木も以前より多く見受けられ、植林用と思われる苗木畑もいたる所にあり、植林に対する自治区政府の政策及び啓発が住民に浸透していると感じた。

植林地に着くまでの間、延々と続く砂漠地帯を再び目にした。年間降水量が200ミリという過酷な気象条件がもたらした、緑のな

い茶褐色の大地。毎年、東京都に匹敵する面積が砂漠化していると言われるが、こうした環境の中で行う植林がいかに困難なことなのか、植林事業とは、まさに自然との闘いであることを再認識させられた光景であった。高速道路を降り、パトカーに先導され10時に到着。2期目の開工式を地元の小中学生、ボランティア約200名と行った。ここは、3ヶ年で220haを植林する計画で、すでに1期目は完了し60haに植林。保育管理のため作業道2.5kmも整備され、活着率87.3%である。今回の2期目では、84haにナツメ40万本、ニセアカシア14万本、計54万本を植林する計画だ。今年の中国は、日本同様厳冬に見舞われ、その影響で黄河の水位が上がらず水の確保に苦慮し、計画よりも工期が遅れているとのこと。開工式では、地元石嘴山市より歓迎のあいさつと、石嘴山市における植林事業が8年目を向かえ、その間200万本以上の植林が行われたことに対する御礼があり、記念碑の除幕式のあと植林活動を開始した。植林地に沿って黄河が流れ、保育管理に不可欠な「水」の確保は容易に行えると想像できたが、穴を掘るたびに「サクサク」としたパウダー状の土砂が堆積しているだけの土質だと分かり、とても黄河沿いの土地とは考えられない土壌であった。

砂埃にまみれながら、11時30分に植林活動を終えバスに乗りこむ時、展示している小学生の絵に足が止まった。その多くに、日中両国の国旗が描かれ、人々が手をつなぎながら植林をしている絵だったからである。前回も、小学生が植林に思いを込めた絵を展示していたが、このように両国の国旗が描かれたものは1枚もなかった。とても感動的な絵であり、植林事業を通じて、日中両国の友好と平和に寄与しようとした10年間の活動が、着実に根付いている証だろうと感じた。



○4月15日(日) 吳忠市太陽山開発区生態緑化モデル林事業(第2期) 寧夏紅寺堡生態緑化プロジェクト視察

昨日は植林作業に加え、長時間の移動などでホテル着が深夜となったが、全員元気に出発した。嬉しいことに今日も快晴である。高速道路に乗り、昨日とは逆に南へと車を走らせた。今日も約2時間の移動だ。目指すは、石嘴山市恵農区よりも深刻な砂漠地帯、吳忠市太陽山開発区である。

植林地に近づくにつれ、会報18号、19号の活動報告の中にも記載されていた、風力発電用の巨大風車と太陽光パネルが姿を見せ始めた。延々と続く砂漠地帯の中、その姿が見え初めて現地に着くまで



の約20kmの間、道路の両側に整然と並べられたその光景に圧倒された。規模が違う。これらの施設は、砂漠に新しい「まち」をつくり、住民を移住させる計画にあわせ整備され、それらを取り囲むように植林事業は行われているとのこと。そういえば、高速道路を降り

た時、軍用トラックに家財道具を積み、バスに住民を乗せた車列と遭遇した。「生態移民」と横断幕が張られたこの車列の長さが半端ではなく、山岳地帯の貧困地域で生活する住民を、このような開発区に移住させているとのことだ。ちなみに、今年は35万人を予定していると聞きさらに驚いた。現在、この自然エネルギー施設は、1日あたり70万KWの発電量だが、移住政策にあわせ将来的には300万KWにすると担当者より説明を受けた。東日本大震災以降、脱原発という国民の声に、エネルギー政策の転換を迫られている日本だが、出発前に連日報道されていた、関西電力大飯原発の再稼働問題一つをとっても、政府の方針が一転二転している日本の現状をみると、いかに中国政府が自然エネルギー政策を積極的に推進しているのか、その本気度を見せつけられた光景であり、その規模の大きさに中国の力強さも感じた。



10時に到着し2期目の開工式を行った。昨日に続き、佐藤団長より東日本大震災に対する義援金等々の御礼とあいさつの後、植林活動に入った。ここは、2013年度までに210haを植林する計画で、1期目は70haを植林済みである。なお、活着率は85%以上とのこと。また、去年は開通していなかった高速道路も整備され、地名どおり急ピッチで開発が行われている様子が見えた。昨日の石嘴山市恵農区とは違い、近くに河川や水路などがなく、水の確保等保育管理が非常に困難な場所かと思われたが、パイプやビニール製のチューブのようなものを張り巡らせ、水を供給できる設備を整えていた。また、そのチューブには、木の根元に常時水滴が落ちるような仕組が施されており、ホース等による定期的な散水よりも、水の節約ができると同時に活着率の向上も期待できるように試験的に運用しているようだ。11時30分に植林活動は終了したが、一緒に植林をした中学生達との記念撮影会が自然と始まり、それはバスに乗り込む直



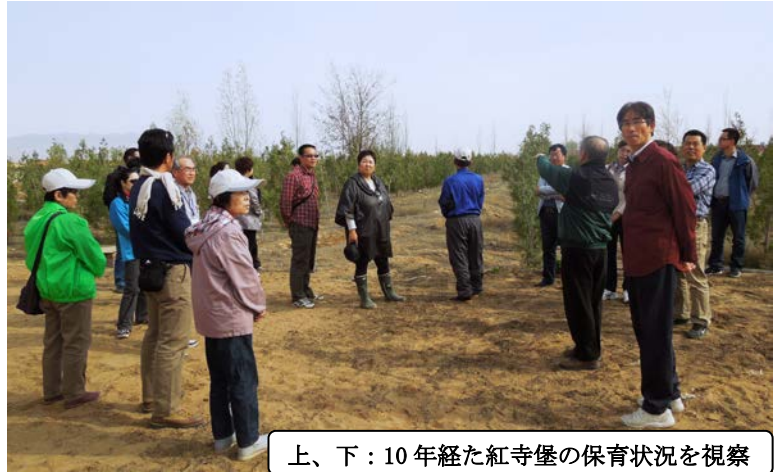
第17回植林緑化派遣団に参加して

広島：金子 哲夫

3回目の参加。この企画が始まって10年の節目。着実な事業の進展状況をこの目で確かめたいとの思いでの参加。2度目の訪問となった紅寺堡で木々の確かの成長を確認ができた。一方で新しい街づくりのため、伐採の予定とも聞き、ちよつと残念な思いも。今回も期待の大きさを改めて実感。今後どう継続するのが大きな課題のように思う。

前まで続いた。そんな名残惜しそうな彼らと握手をしながら、われわれ日本人と一緒に植林したことを、いつまでも心に刻んでほしいと願い現地を後にした。

再び高速道路に乗り、第3回派遣団が植林をした「寧夏紅寺堡生態緑化プロジェクト」への視察に向かった。前回訪問時は、高速道路を降り一般道を抜け、道とはいええないデコボコ道に揺られながら、やっとの思いで植林地へ到着した記憶があったが、すでに高速道路のICが中心部に作られ、その周辺はきれいに緑化されていたため、すぐにその記憶はかき消されてしまった。この地域は、古くから集落単位で農業を営む人々が点在し、わずかな森林を開拓しながら畑を作り生活していたが、生産性は低く無計画な森林の開拓や放牧が自然環境を破壊し、砂漠化の要因の一つとなっていた。中国政府はその対策として、このような貧困地域に点在して生活する住民に、砂漠化防止のため放牧を全面的に禁止し、彼らに住居と農地を与え集団で移住させ、農業生産力の高い地域づくりを目指していた。春の嵐の中、砂埃にまみれながら地元の人々と植林をした2005年4月。見渡す限りの砂漠地帯に、わずかな緑と住居が重なり合っていた当時の「まち」。そこに、彼らを定住させるため、植林で砂漠を緑化し、中国側の大規模な都市開発事業とあわせ、新たな「まち」をつくる壮大な計画が進行中であつた。ICを降りるとその「まち」が姿を現した。目の前に広がるその光景に、本当に同じ場所なのかと自分の眼を疑った。何もない砂漠に被われていたあの小さな「まち」が、一つの「都市（まち）」へと変貌を遂げているではないか。ここが、見渡す限りの砂漠であつたと誰が信じるだろう。振り返れば、事前調査に始まり、風が吹けば5m程度に盛り上がり常に形を変える砂漠地帯を、重機や人力で砂山を整地し区画を作り、遠く黄河より水を引き、砂を固めやっとの思いでスタートした植林事業。植林後も、過酷な自然条件が故に欠かされない灌水や、除草や枝の剪定等の樹木管理、野ねずみなどの野生動物対策、そして乾燥地帯だけに火災に対する防火体制や防火意識の向上など、気が遠くなるような植林後の管理も徹底して行ってきた、地元の人々の「情熱」がこの光景に凝縮されているのだと思うと熱いものがこみ上げてきた。この感動的な場面は、生涯忘れることはないであろう。



上、下：10年経た紅寺堡の保育状況を視察



その「都市」の中心部へと車を走らせ、植林済地の視察へと向かった。沿道には1階が店舗、2階が住居という形式の集合住宅が立ち並び、前回訪問時は空き家が目立ったその住宅にも、様々な業種の店が入って活気に満ち溢れていた。また、新しい道路が何本も整備され、その区画内にはマンションが建てられており、その周辺はもちろん緑化され元気に遊ぶ子供たちの姿もあった。また、遠くに目を向けると、土埃をあげながら工事用のトラックが行き交う光景を目にし、道路とマンションを同時進行で建設しており、このようなセットでの開発は今後も続くと言明を受けた。

現地に到着し、「林」といっても良い場所を歩きながら記念碑を目指した。記憶をたどったが、あまりにも周辺の環境が変わっているため、本当にここだったのか半信半疑であつたが、記念碑と真っ直ぐに伸びる水路が見え始め、その位置関係でやっと現地だと確認ができるほど緑化されていた。あの棒のようだったポプラの木々が、10m近くにも成長し「ポプラ林」をつくっているのには本当に驚いた。元々、そこにあったかの様に並べられたその姿は美しく感動的であり、しばらくは、そのポプラの木を

見上げながら
7年間という
時間の長さを感じていた。
季節的に緑が少ない時期ではあるが、幹の太さや根の張り具合もよく、さらに雑草が砂地を被っており「砂漠を緑の大地に」とスタートしたこの壮大な計画は、夢物語ではなく現実のものとなっていた。この紅寺堡生態緑化プロジェクトの成功を見届け、また、ここで植林をした日本の仲間たちを誇りに思いながら現地を後にした。

プロジェクト名	事業実施期間	植林面積
寧夏紅寺堡生態緑化プロジェクト（済）	2002 年度～2004 年度	330ha
寧夏・日中青年平羅県生態緑化林事業（済）	2004 年度～2006 年度	290ha
日中青年寧夏中衛生態緑化モデル林事業（済）	2005 年度～2007 年度	300ha
日中青年銀川生態緑化林事業（済）	2007 年度～2009 年度	180ha
日中青年石嘴山生態緑化林事業（済）	2007 年度～2009 年度	250ha
寧夏中寧県日中青年生態緑化モデル林事業（済）	2008 年度～2010 年度	300ha
寧夏吳忠市太陽山開発区日中青年生態緑化モデル林事業（継）	2010 年度～2012 年度	210ha
日中青年石嘴山市恵農区生態緑化モデル林事業（継）	2010 年度～2012 年度	220ha
日中青年河北遷西県生態防護林（新）	2011 年度～2013 年度	157ha

高速道路に乗るまでの間、生まれ変わった「都市」を眼に焼きつけながら、当時、**中青連本部の副秘書長だった湯(タン)さんの言葉**を思い出していた。『植林による生態系の改善なくして、産業の発展はありえません。砂漠に一つの「まち」をつくり産業を興し、貧困地域に暮らす住民を移住させ生活を豊かにしたいのです。そして、こうして日本のみなさんと中国の子供たちが一緒に植林することで、子供たちに、日中の友好と平和、また、環境問題の大切さも教えているわけです。これが植林事業の目的です。』と涙を流し語ってくれた。あれから、7年。植林で砂漠が「都市」になり、そして、貧困地域に点在していた人々が移住したその「都市」は活気に満ち溢れ、子ども達の絵には日本の国旗が描かれるようになり…と。湯さんの夢と情熱も、その言葉どおり叶えられていた。

現在、湯さんは日本の中国大使館に勤務され、今も日中友好のため尽力されている。

○4月16日(月)・17日(火) 北京へ そして帰国

早朝、寧夏回族自治区に別れを告げ北京へと向かった。飛行機から見える緑のない大地。大分→羽田間とは余りにも対照的なこの景色に、緑の大切さや、日本の自然の素晴らしさをあらためて感じた。北京に到着し、高速道路に乗り市内へ移動。北京の天気も快晴で、寧夏よりも気温が高く半袖でも汗ばむような陽気であった。しかも、空気は澄んで花は咲き乱れ、街中には北京の春の風物詩でもある、綿で包まれた柳の種子「柳絮(りゅうじょ)」が雪の様にふわふわと舞っており、「こんなきれいな北京は見たことがない」と佐藤団長がいうほど美しい北京市内であった。午後から市内観光を行い、夕食は中青連の洪桂梅さんのご好意で、北京料理を食べながら中国最後の夜を楽しく過ごさせて頂いた。その後、ホテルで解団式を行い、団員一人ひとりが今回の植林に対する様々な感想を述べられ、第17回植林緑化派遣団の活動を締め括った。

私は、これまで派遣された200名を超す団員の中で、幸運にも、自分で植えた木の成長を確認できる機会を頂いた。その中で、7年前とはまた違う、感動的な光景や生涯忘れられることの出来ない場面、

植林緑化派遣団に参加して（抜粋）

香川：福田 裕之

——植林緑化派遣団の事業への参加は、自治労香川からの要請もあつたが、以前から興味もあり参加することとしました。はじめは軽い気持ちで参加を決めましたが、事前学習会や現地での交流等で、事業の重みを深く感じる事となりました。

——広大な中国の中で、砂漠化を抑えるための緑化は一筋縄ではできないことをひしひしと感じました。団長も言っていましたが、緑の架け橋推進プロジェクトで植林事業を実施できるのは「点」や「線」かもしれません。しかし、植林事業を続けてきたことで、地球規模で考えて環境を保全しないといけないという風に現地の人たちの意識が変わり、実際に砂漠だったところが緑化され、その緑を守るために努力しているところを目の当たりにしました。また、プロジェクトを実施しているところ以外でも緑化が進んでおり、さらに緑化が広がって、日中の友好の輪も深まればいいなと思いました。

また、日本人に対する現地の人々の心の変化にも接することができた。この植林事業は、砂漠を緑化し健全な生態系の回復行い、新たな「まち」つくるという目的がある一方、中国のみなさんと協同して、木を植え、その木を育てていくことは、同時に日中両国の友好と平和を築き上げていることだと確信した。2005年は「靖国参拝」や「歴史教科書問題」、2012年は「尖閣諸島問題」と、他にも様々な諸問題が顕在化する日中関係にあって、現地のみなさんと汗を流す中に両国間の「きしみ」は存在しない。この植林事業は、まさに民間レベルでの「平和外交」だといっても過言ではない。また、中国の広大な大地の中で、この植林事業は本当に小さな「点」かもしれないが、それを「線」にして、将来的には「面(森)」にしたいと、佐藤団長が常々話されていたことが、このプロジェクトが10年目を迎え現実のものとなっていた。7年ぶりに現地をみて、20年後、30年後には必ず「面(森)」になっていると同時に、日中両国の友好もさらに深まっている、そう思えてならなかった今回の活動だった。

終わりに、「緑の架け橋」の意義ある活動が、今後も継続していくことを心から願い、また、この機会を与えて頂いた、自治労大分県本部、関係者、そして気持ちよく送り出してくれた職場の仲間に感謝し活動報告としたい。
(2012年6月5日 記)

今回、新規事業地となっている「日中青年河北遷西県生態防護林事業」については、植林時期が5月～8月になること、また場所が河北省唐山市にあることから、旅程に入れませんでした。9月の18回派遣団の際、訪問する予定です。



第17回植林緑化派遣団参加者(11名)

佐藤晴男	ﾌﾞﾗｲﾄﾞ代表
金子哲夫	元衆議院議員
朝倉正哲	大分・農業
朝倉博美	大分・農業
阿部正義	大分・農業
阿部完子	大分・農業
豊嶋正人	宮城・自治体議員
藤森寿子	広島・団体役員
福田裕之	香川・自治労
野々下直人	大分・自治労
篠原尚	I F C C事務局



呉忠市太陽山開発区で(2012・4・15)

※氏名順、不同

第17回植林緑化派遣団に参加して

大分：朝倉 正哲

羽田、北京間は眼下に緑の大地を見ることができた、空路の北京から銀川、そして銀川市内でも緑を見ることができるが、植林地である恵農区や呉忠市へ向う高速道は砂地で、時々緑を見るものの…少ない…。あの広大な中国の砂漠で高速道が出来、新しい町が出来、70万kwの太陽光発電パネル、無数の風車(風力発電所)が設置されている。その様な砂漠の中でのプロジェクト。呉忠市太陽山開発区植林事業の開校式に参加し現地の奨学生、婦人達との植林作業。その面積は点にも等しい。

現地に何日も滞在して植林を続けたい思いに成りましたが、現地の奨学生達に期待をかけて去った次第です。また、以前に植林した所を視察して見ましたが大きく育っていたので安心しました。10年後には今回植林した所が緑に成っている事を信じ、また行ってみたいなあと思いました。